

爬虫類

1. 選定・評価方法の概要

爬虫類では、東京都島しょ部において現在生息が確認されている在来種のうち、陸域及び島しょ部近海を生活の場とするものを評価の対象とした。

検討対象種は、伊豆諸島については、トカゲ類3種、ヘビ類5種、ウミガメ類4種の合計12種とした。小笠原諸島については、トカゲ類2種とウミガメ類4種を検討対象種とした。

絶滅のおそれの評価は、基本的に定量的要件を用い、CR(絶滅危惧IA類)とEN(絶滅危惧IB類)も区別した。

なお、これまで島しょを取り巻く海域に生息する海棲爬虫類(ウミガメ類とウミヘビ類)の基礎調査は十分ではなかった。そのため、セグロウミヘビの漂着死体の記録や、エラブウミヘビとヒメウミガメの目撃記録が得られたものの、情報量が極めて不足しているため、これらは評価の対象に含めなかった。今後、調査を進め、客観的に生息状況の評価が行えるようにしなければならない。

2. 選定・評価結果の概要

<伊豆諸島>

評価の結果、ウミガメ類の4種のうち、上陸産卵の記録があるアオウミガメとアカウミガメをVU(絶滅危惧II類)とし、上陸記録がない、あるいは本来の産卵環境から地理的に離れているが沿岸域で生息記録のある2種(タイマイとオサガメ)をDD(情報不足)とした。

ヘビ類では、生息する島の数と面積、過去30年間の記録を基に判定した。生息する島が大島1つに限られ、確認が文献でしかないことを理由にジムグリをCR(絶滅危惧IA類)と判定し、複数の島に生息するが減少傾向がはっきりしていたアオダイショウとニホンマムシをEN(絶滅危惧IB類)とした。シロマダラは、情報不足によりDDとした(Hasegawa, 2003)。

伊豆諸島と伊豆半島の固有種オカダトカゲは、伊豆諸島の主要な島に生息するが島間で遺伝的な分化が進み、かつ人為的に移入されたニホンイタチの捕食により三宅島、八丈島、青ヶ島集団の生息個体数が激減したため、島ごとに見た場合、これらの3島についてはENよりランクの高いCRに相当すると評価した(Hasegawa, 1999)。ニホンカナヘビは、当面の危機が認められなかったためランク外とした。

今後の課題として、オカダトカゲの生存を脅かすニホンイタチと交雑による遺伝子浸透の原因となっている移入ニホントカゲをはじめ、島しょ集団への脅威となる外来種(ヒキガエル類)の駆除を検討していく必要がある。オカダトカゲの三宅島、八丈島、青ヶ島集団については、島内に断片的に残されている小集団の実態を把握し、その生息環境を保全する必要がある。

<小笠原諸島>

検討対象となった6種のうち、グリーンアノールの捕食及び競争によって個体数の減少したオガサワラトカゲをNT(準絶滅危惧)、上陸産卵個体数が大きく減少したアオウミガメをVU(絶滅危惧II類)と評価した。アカウミガメとタイマイは、上陸産卵の記録が十分ではなくDD(情報不足)とした。ミナミトリシマヤモリは太平洋の島々に広域分布するため、日本では南硫黄島と南鳥島からのみ記録され分布域の狭い種であるが、固有性に関する情報の不足からDDと判定した。

小笠原諸島における絶滅危惧種の保護、保全対策では、現在すでに行われているグリーンアノールの駆除を、オガサワラトカゲの保護という視点に広げ実施する必要がある。小笠原のオガサワラトカゲは、同属の他の島しょ(マリアナ諸島など)集団と比較して最も体サイズが大きく、小

笠原諸島独自の形質を有しているからである。

【引用文献】

Hasegawa, M., 1999. Impacts of introduced weasel on the insular food web. In: H. Ota (ed.) Diversity of Reptiles, Amphibians and other terrestrial animals on tropical Islands: Origin, current status and conservation, pp. 129-154. Elsevier.

Hasegawa, M., 2003. Ecological diversification of insular terrestrial reptiles: A review of the studies on the lizard and snakes of the Izu Islands. *Global Environmental Research*, 7: 59-67.

(長谷川 雅美)

アオウミガメ

Chelonia mydas

カメ目
ウミガメ科

伊豆諸島

VU

環境省

VU

【形態・生態】

直甲長 80 ~ 110cm。体色は背面が濃緑色から黒色、腹面は淡い黄色。背甲の表面が滑らかで、あごの表皮が鋸歯状に角質化している。5月下旬~8月下旬に一度に平均100個の卵を1シーズン中に平均4回産卵する。稚ガメのころは動物食が強く、成長に伴い海草や藻類の植物食に変わる。

【分布の概要】

伊豆諸島、小笠原諸島、南西諸島(毎年産卵が行われるのは小笠原諸島と南西諸島に限定);太平洋、大西洋、インド洋の熱帯から温帯域、および地中海

【伊豆諸島における生息環境】

島周辺の沿岸部で海中を遊泳する個体の観察事例がある。上陸・産卵・孵化は大島、新島、三宅島の3島で記録されている。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

漁業との関連では、定置網やエビ網漁での混獲事例がある。また、海岸に上陸した雌の産卵を妨げないような配慮が望まれる。

【関連文献】

植松正宏・成瀬裕昭, 2002; 植松正宏・成瀬裕昭, 2005; 成瀬裕昭・村上博基, 2009.

(執筆:長谷川雅美)



アカウミガメ

Caretta caretta

カメ目
ウミガメ科

伊豆諸島

VU

環境省

EN

【形態・生態】

直甲長 70 ~ 105cm。頭部が比較的大きく、下顎が発達。体色は褐色で腹面は淡い。5 ~ 8月に茨城県以南の太平洋岸および南西諸島で産卵する。1回の産卵数は約100、1繁殖期に1 ~ 5回上陸して産卵する。性成熟に30年以上かかると推定され、成体は海底の軟体動物や甲殻類を摂食する。

【分布の概要】

日本では、茨城県以南の太平洋岸、南西諸島を中心に見られる。太平洋、大西洋、インド洋の熱帯から温帯域および地中海に生息する。日本における産卵は茨城県以南の太平洋岸および南西諸島の砂浜で行われる。

【伊豆諸島における生息環境】

上陸・産卵・孵化は、大島、新島、神津島、三宅島、八丈島での記録がある。このうち、大島と新島では毎年上陸が確認されている。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

漁業との関連では、はえ縄や底引き網で混獲される可能性がある。また、海岸に上陸した雌の産卵を妨げないような配慮が望まれる。

【関連文献】

植松正宏・成瀬裕昭, 2002; 植松正宏・成瀬裕昭, 2005; 島田貴裕, 2009.

(執筆:長谷川雅美)



© マリンワールド海の中道

タイマイ

Eretmochelys imbricata

カメ目
ウミガメ科

伊豆諸島

DD

環境省

EN

【形態・生態】

直甲長 70 ~ 90cm。背甲の鱗板は屋根瓦状に重なり、甲の縁も鋸歯状にとがっている。頭部は細長く、口吻もとがっている。背面は褐色で、腹面は淡い黄色。6 ~ 8月に沖縄以南の南西諸島で産卵する。比較的定着性が強いとされ、主に海綿類を摂食する。

【分布の概要】

太平洋、大西洋、インド洋の熱帯域、特にサンゴ礁海域に多い。

【伊豆諸島における生息環境】

イセエビの刺し網への混獲記録があるのみで、伊豆諸島での産卵記録はない。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

観察事例が少ないため、情報不足である。

【関連文献】

千石正一ら(編), 1996.



© マリンワールド
海の中道

(執筆:長谷川雅美)

オサガメ

Dermochelys coriacea

カメ目
オサガメ科

伊豆諸島

DD

環境省

【形態・生態】

直甲長 120～190cm で、現生ウミガメ類では最大種。鱗板や肋骨の変化した甲骨板を有する甲を欠き、ゴム状の皮膚に覆われる。背面に5条、腹面に5条、体側に1条のキールがある。背面は黒色で、白斑が点在することがある。腹面は白斑の占める範囲が広がり、全体に白色になる。熱帯アジアでは3～9月に産卵する。幼体、成体ともに海を広範囲に遊泳し、主にクラゲ類を食べる。

【分布の概要】

太平洋、大西洋、インド洋の熱帯域から温帯域。日本では稀に回遊個体が発見される。

【伊豆諸島における生息環境】

伊豆諸島から本州までの広い海域に分布している可能性が高いことから、伊豆諸島の近海に生息していると考えられる。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1959、1969、1971年に八丈島近海での捕獲記録があり、本州近海の相模湾などで遊泳個体が目撃されているが、観察事例が少ないため、情報不足である。

【関連文献】

葛西重雄, 1968; 三木誠, 1989; 千石正一ら (編), 1996.

(執筆: 長谷川雅美)



© エバーラスティング・ネイチャー

オガサワラトカゲ

Cryptoblepharus nigropunctatus

トカゲ目 (有鱗目)
トカゲ科

伊豆諸島

DD

環境省

NT

【形態・生態】

頭胴長 45～60mm。背面は褐色で、黒褐色または黄褐色の斑紋が散在する。体側には褐色の不明瞭な縦条がある。まぶたは上下が融合し、下まぶたが透明になっている。日の当たる石垣、林道脇の斜面、林床、大木の幹、倒木の上などを活発に徘徊し、小型の昆虫や節足動物を捕食する。

【分布の概要】

伊豆諸島、小笠原諸島

【伊豆諸島における生息環境】

不明である。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

目撃証言をもとに伊豆諸島の分布が示唆されているが、標本の採集に基づく確認はされていない。生息の有無の確認を行うことが望まれる。

【関連文献】

原幸治, 1976; 千石正一ら (編), 1996.

(執筆: 長谷川雅美)



オカダトカゲ

※備考 (p. 348)

Plestiodon latiscutatus

トカゲ目 (有鱗目)
トカゲ科

伊豆諸島

EN

環境省

LP

【形態・生態】

頭胴長 60～96mm。ニホントカゲに酷似する。幼体はニホントカゲと同様に5本の縦条が入り、尾が青色であるが、本種のほうが、青みの消失が早い。民家の石垣、ガレ場、草地、林内などに生息する。クモ、昆虫、ミミズ、ヨコエビなどの地表性小動物を捕食する。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州 (伊豆半島)

【伊豆諸島における生息環境】

海岸の海浜植物群落から森林内、さらに畑や人家の庭まで幅広い環境に生息する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

以前は多くの島で全島的に生息していたが、ネズミ駆除の目的でニホンイタチが導入された島では、ニホンイタチの捕食により、遅成熟・大卵少産タイプの集団が激減した。また、ニホントカゲが移入した島では種間交雑が生じている。

【関連文献】

千石正一ら (編), 1996.

(執筆: 長谷川雅美)



ジムグリ

Euprepiophis conspicillatus

トカゲ目(有鱗目)
ナミヘビ科

伊豆諸島



環境省

【形態・生態】

全長 70 ~ 100cm。体鱗は 21 列。虹彩は黄褐色。背面は茶褐色で黒い斑点が散在するが、中には全く斑点が見られない個体もいる。腹面には市松模様が入ることが多い。幼蛇は赤色の背中に黒い縞が入る。樹林に生息し、半地中生活をする。モグラやネズミを捕食する。性質はおとなしい。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州、南西諸島(屋久島、種子島)

【伊豆諸島における生息環境】

伊豆諸島における情報がほとんどないため、不明である。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

大島における記録が 1 例あるのみで、その後の記録が全くない。

【関連文献】

原幸治, 1977b; 千石正一ら(編), 1996.



(執筆者: 長谷川雅美)

アオダイショウ

Elaphe climacophora

トカゲ目(有鱗目)
ナミヘビ科

伊豆諸島



環境省

【形態・生態】

全長 110 ~ 190cm。体鱗は胴体中央で 23 列または 25 列。虹彩は黒褐色。体色は青みがかったオリーブ色や褐色で個体差が大きい。幼蛇は背中にはしご状の模様が並び、ニホンマムシに似る。人家や近傍の水田、草地、河川敷、樹林などに生息し、樹上で見られることが多い。成蛇はネズミや鳥類を捕食するが、幼蛇はカエルやトカゲなどを好んで食べる。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州、南西諸島(口之島以北)、対馬

【伊豆諸島における生息環境】

畑から発達した照葉樹林の内部まで、生息環境は幅広い。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

神津島では 1981 年以降の長期モニタリングが行われているが、2004 年以降は記録が途絶えている。一方、同所的に生息するシマヘビは減少していない。

【関連文献】

Hasegawa, M. & H. Moriguchi, 1989; 千石正一ら(編), 1996.



(執筆者: 長谷川雅美)

シマヘビ

Elaphe quadrivirgata

トカゲ目(有鱗目)
ナミヘビ科

伊豆諸島



環境省

【形態・生態】

全長 80 ~ 200cm。体鱗は胴の大部分で 19 列。虹彩は通常赤色。背面は緑がかった茶褐色で黒い縦縞が 4 本入る。体色の変異が大きく、全身真っ黒な黒化型もいる。幼蛇は赤茶色で横帯が入る。水田、水路脇、石垣、河川敷、草地、畑など様々な場所で見られる。カエルをよく食べ、ヘビやトカゲなどの爬虫類も捕食することが多い。それ以外にも哺乳類や鳥類など、得られる脊椎動物を柔軟に餌として利用する傾向がある。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州、南西諸島(大隅諸島)

【伊豆諸島における生息環境】

畑から発達した照葉樹林の内部まで、生息環境は幅広い。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

祇苗島固有の巨大化した集団がペットとして商取引されることによって減少のおそれがある。

【関連文献】

Hasegawa, M. & H. Moriguchi, 1989; 千石正一ら(編), 1996.



(執筆者: 長谷川雅美)

シロマダラ

Dinodon orientale

トカゲ目(有鱗目)
ナミヘビ科

伊豆諸島



環境省

【形態・生態】

全長30～70cm。体鱗は胴体中央で17列。虹彩は黒褐色で瞳孔は縦長。背面は灰色で黒色の横帯が入る。幼蛇の体色は、成蛇よりも明暗がくつきりしている。樹林に生息し、夜行性で昼間は石の下や石垣の隙間などに潜む。トカゲや小型のヘビなどを捕食する。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州、南西諸島(屋久島、種子島)

【伊豆諸島における生息環境】

不明である。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

近年の確認は大島での脱皮殻の確認のみであり、現状は不明である。

【関連文献】

ゴリス, R. C.・寺田博, 1977; 原幸治, 1977a.



(執筆: 長谷川雅美)

ニホンマムシ

Gloydius blomhoffii

トカゲ目(有鱗目)
クサリヘビ科

伊豆諸島



環境省

【形態・生態】

全長40～65cm。体鱗は胴体中央で21列。褐色の背面に楕円形の模様が並ぶ。黒化型も知られている。樹林やその周辺の水田や畑に生息する。上顎骨に長大な毒牙を持ち、毒蛇として知られるが、性質はおとなしい。食性は幅広く、ネズミやカエルのほか、小鳥やトカゲ、小型のヘビなども捕食する。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州、南西諸島(屋久島、種子島)

【伊豆諸島における生息環境】

大島では、海岸の草地から、二次林、溶岩原までさまざまな環境から発見される。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

八丈島では以前は高密度であったが、ニホンイタチの導入に伴い激減した。

【関連文献】

Goris, R. C., 1967; 原幸治, 1977b.



(執筆: 長谷川雅美)

【種名・学名などの準拠文献】

種名、配列は、日本爬虫両棲類学会による日本産爬虫両棲類標準和名（2009年12月6日改訂案）に従った。

【備考】 レッドリスト改定時における評価の根拠など補足情報

和名	備考
オカダトカゲ	本種は、各島の個体群が遺伝的に分化していることが明らかにされている。三宅島、八丈島、青ヶ島の個体群は特に減少が顕著であり、島ごとに見た場合、ENより1ランク高いCRに相当する。

【関連文献】

- Goris, R.C., 1967. The reptiles and amphibians of Hachijo Island. 爬虫両棲類学雑誌, 2(3): 25-30.
- ゴリス, R. C.・寺田博, 1977. 伊豆大島の爬虫類と両生類. 日本爬虫両生類学雑誌, 7(2):44-45.
- 原幸治, 1976. オカダトカゲの分布域. 爬虫両生類学雑誌, 6(3): 95-98.
- 原幸治, 1977a. 東京都のヘビ. どうぶつと動物園, 29(1): 10-13.
- 原幸治, 1977b. 伊豆大島のヘビ. 爬虫両生類学雑誌, 7(2): 34-35.
- Hasegawa, M. & H. Moriguchi, 1989. Geographic variation in food habits, body size and life history traits of the snakes on the Izu Islands. In M. Matui, T. Hikida and R.C. Goris. (eds.) Current Herpetology in East Asia. pp. 414-432. 日本爬虫両棲類学会.
- 葛西重雄, 1968. 八丈島動植物目録, 東京都大島町.
- 三木誠, 1989. 八丈島で捕獲されたオサガメ. ウミガメニュースレター, (4): 8.
- 成瀬裕昭・村上博基, 2009. 伊豆諸島におけるアオウミガメ産卵・孵化の再記録. ウミガメニュースレター, (79): 3-6.
- 千石正一・疋田努・松井正文・仲谷一宏(編), 1996. 日本動物大百科 第5巻 両生類・爬虫類・軟骨魚類. 平凡社. 189pp.
- 島田貴裕, 2009. 八丈島沿岸に生息するウミガメの予備調査. ウミガメニュースレター, (79): 7-8.
- 植松正宏・成瀬裕昭, 2002. 伊豆諸島. 亀崎直樹・通事祐子・松沢慶将(編). 日本のアカウミガメの産卵と砂浜環境の現状, pp. 152-155. 日本ウミガメ協議会.
- 植松正宏・成瀬裕昭, 2005. 伊豆諸島におけるアオウミガメの上陸・産卵の初記録. ウミガメニュースレター, (64): 22-25.